黄　靖茹
HUANG Jingru

稲荷神

岩絵具、染料、墨、金箔、コーヒー、雲肌麻紙

稲荷神

中国では古来より、人が生きる場所を「陽の世界」、人が死ぬ冥界を「陰の世界」と考えてきた。しかし、冥界は虚無ではなく、現世のように賑やかな街の世界であり、亡霊はあちらの世界で新たな人生を歩み始めることになる。

現世と冥界は鏡の表と裏のごとく、私たちが現世で幸せに生きて願掛けする時、この幸せは鏡の裏側の世界から廻ってくる温かみだ。生への畏敬の念の重さを感じさせるには、死の部分を補完する必要があると考えている。よって、作品の表現では、中国の漢の時代に発掘された墓壁画や葬祭用具の様式を多く参考にした。故人を祀るため創造された陰の世界は、鏡の裏側の世界であり、生きている現世の人々にとって幸せを映し出している。

人間一人一人の人生は、不変の世界に比べると相対的に極めて短い。そのなかで、私たち人間と世界のすべての生き物とのつながりは孤立したものではなく、川の流れのように一つに繋がっている。私たちは先人たちの精神の高さを感じ、彼らが存在したことを祝福する。そして、それを後人たちが受け継いでいく。

いのちと一番繋がっているのは食物だろう。短い人生の中でも幸せになりたい人々は五穀豊穣の神に祈願してきた。人は、無数の命の犠牲の上に生き、また、無数の命の祝福の下に安らかに生きている。つまり、生き物の死体をかじって生きているからこそ、自分が生きていると実感できるのだ。だから、言葉を話せない動物たちの生きる仕草は、私たちを感動させ、尊敬に値する存在として崇められると思う。

稲荷大社の前で見た稲荷像の笑顔は、満たされない欲望で感覚が麻痺して惨めな気持ちになっている私たちに、尊敬の念を抱かせる。そして、今の人々に満足することを気づかせる。「あなたは、ちり(塵)だから、ちりに帰る」[1]。六角堂で柳の枝におみくじが密集しているのを見て、その願いの重さは神様の髪になり、神様の霊力になり、同時に彼ら自身の力にもなるのだな、私にはそう感じられた。

---

[1]『旧約聖書』創世記3:19